

国際情勢や事件の背景などニュースの本質を、誰にもわかりやすく話すことで定評のある、池上彰さんの著書『伝える力』は、100万部を超えるベストセラーになりました。ここには、特別な秘訣ではなく「まず自分自身が深く理解すること」「謙虚に対象に向かうこと」「良い聞き手になること」など、良い話し手になる基本が書かれています。

このようなジャーナリストを初め「話のプロ」と呼ばれる仕事は数多いが、医師もまた「話のプロ」ではないかと常々思ってきました。個性も感情も病状も千差万別で、言葉の理解力も異なる多くの患者を相手に、短時間のうちに、高度に専門的な内容を、それぞれにふさわしく、分かりやすく話す。誤りは許されないのです。

医師の言葉によって励まされ、生きる希望を持つことも多いでしょう。これほどの「話のプロ」いや「言葉のプロ」がほかにいるのでしょうか。しかし、医師のすべてにこのような資質が当然に備わっているわけではなく、いろいろな経験の中から「伝える力」を日々磨いておられるのだと思います。

一方患者の方はどうでしょうか。私も、数多くの受診を経験してきました。そんな時に、実は「言葉」をめぐる後悔が多いのです。診察室を出た直後に襲ってくる「私の説明不足のために、正しく診察してもらえなかったのではないか」という強迫観念です。中でも、医師から検査、診断の結果を聞いたあとには「大事なことを聞き漏らしたのではないか」という不安がつきまってくる。患者とは実に厄介なものです。

生活習慣病については、患者を行動に向かわせる、医療者の指導、アドバイスが大変重要だと思います。食生活や運動の重要性は、いろいろな場で指導を受けてきました。しかし、なかなか実行できないのです。私のような怠惰な人間に有効な言葉は、実はまれなのです。そんな私に、あるとき医師がこんなことを言いました。「小倉さん、世の中にはあんまり太ったおじいさんって、いませんよね?」「はあ」と私。そんなことは考えたことがなかったが、たしかに日本では、肥満した老人はあまり見ないような気がします。「どうしてだと思っ?」私はその答えを心の中で探して「そっ」としました。もしかして、彼はこう言いたいのではないか。「太った人は、老人になる前に死んでしまう」

私は、そのやり取りをもとに『未来マシーンによろこそ』という物語を書きました。中学生の主人公が、大学の文化祭で「未来マシーン」という機械に出会う。髪の毛を一本取られ、体重を測られ、丼物やガールフレンドの好みなど、機械が発する、気まぐれのような100の質問に答えると、10年後、20年後の自分の姿が画面に映し出される。しかし、30年後の画面は真っ白のまま。どうしたのかとっていると、機械の横にいた学生が言うのです。「30年後の君の画像はないみたい。君は死んじゃってる、なんちゃって」

この物語は、篠宮正樹先生に立派な医学的解説をつけていただき、共著となって汐文社から発刊されました。医学的知識を親しみやすく、分かりやすく子ども達に伝える、小象の会の試みの一つとして。

学生の頃の記憶には断片的なものが多い。それは言語学の最初の講義の時だったと思いますが、教授は冒頭に「言語は通じないものなんだ」と言いました。凡庸な学生の私は、そこから先の講義内容を全く記憶していません。しかし、「言語は通じないものだ」という逆説的な発言は、今に至るまで私の自戒となりました。

言語が通じないものであればこそ、作品の創作に当たって、少しでも読者に伝わるように、表現を工夫し、努力する。患者と医療者との間でも、同様ではないでしょうか。

(書籍『小象の 元気！で行こう』第59話より)